



# 鍋島焼の生産と有田 (中編)

色絵唐花文変形皿  
大川内山(1650  
〜1660年代)  
九州陶磁文化館蔵



久米邦武著『有田皿山創業調子』所収の「源姓副田氏系圖」によると、最初に“御道具山”を唱えたのは高原五郎七という人物で、岩谷川内に移り住んで始めて“青磁”の焼成に成功し、藩主に献上したことが契機とします。しかし、有田では青磁は岩谷川内に窯場が開かれる以前からすでに焼きはじめられており、それを事実として是認することはできません。

ところが、この五郎七の“青磁”なるものを、緑など寒色系の上絵の具を多用した、色絵磁器と考えると時期的にも何らの矛盾もなくなるのです。色絵磁器の創始は、現在では、1640年代中頃と考えられており、慶安4年(1651)には將軍家への例年献上がはじまりますので、それに先だって藩主への献上が開始されたと考えるのはごく自然なことです。

現状ではその最初の献上品と断定はできませんが、鍋島家の伝来品を所蔵する鍋島報効会(徴古館)には、初代藩主勝茂の旧藏品と伝えられる国の重要文化財「色絵山水竹鳥文輪花大皿」(註)が、手本とした中国・景德鎮磁器(祥瑞)とともに残されています。やはり緑絵の具を多用していますが、手本とした祥瑞とは異なり、緑絵の具の垂れをうまく制御できておらず、赤も発色不良で茶色味を帯びるなど、客観的な視点では、いささか技術的には未熟なものです。

この頃の色絵製品は、御用品であっても、分類的には“鍋島様式”ではなく、いわゆる“古九谷様式”に区分されるものです。特に岩谷川内山の場合は、器面を地文や丸文で埋めることなどを特徴とする祥瑞の影響が強く、細かい文様の代わりに、黄や緑の色絵の具や瑠璃釉などでベタ塗りするものなどもあります。大川内山で完成した初期の鍋島様式が、文様で埋め尽くしたものが多いのは、この祥瑞の影響によります。また、高台を高くして、外側面に塗り潰した櫛目文など

を描くことも、同様に祥瑞に見られる技法です。

五郎七は、その後キリシタン宗門改のうわさを聞きつけ、“青磁”の諸道具を跡形もなく谷に投げ捨て、有田から逃亡したと言いますが、残された弟子の副田喜左衛門と善兵衛が「青磁素焼物等拾集 水干シテ相考」技術を復興し、御道具山を再興したとします。やはり、この記述も色絵素地等を拾い集めたのなら意味が通じますが、通常青磁の場合、開発された当時まだ素焼きの技法はありませんし、青磁釉を掛けてはじめて青磁であって、素焼きの状態で白磁などとの違いはありません。

これにより、喜左衛門は御道具山役に任じられ、善兵衛は細工人頭を仰せ付けられたと言います。正保4年(1647)には、江戸の藩主より陶工の追放命令が下されており、佐賀藩邸に交渉のため皿山の主だったものが集められました。その時喜左衛門も呼ばれていますので、その頃にはすでに喜左衛門が御道具山役を務めていたと推測されます。以後も副田家は、御道具山役や大川内御陶器方などとして、代々御道具山に関わりました。(村上 伸之)

註) 文化遺産オンライン

<http://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/225159>

色絵丸花唐草文四方小皿  
岩谷川内山(1640〜1650年代)  
九州陶磁文化館蔵(柴田夫妻コレクシヨン)



# 皿 季刊 山

No.140

冬  
2024

# 令和5年度 第30回全国重要無形文化財保持団体協議会 佐賀・有田大会(第一回記念大会) ～完了報告編～

全国重要無形文化財保持団体協議会（以下、全重協）について、これまで令和2年3月1日発行の館報125号から3年以上に渡ってご紹介してきました。今号ではその集大成として、令和5年11月に満を持して実施された佐賀・有田大会の全容についてご報告します。



テープカットの様子

左から十五代酒井田柿右衛門氏、兒玉浩明佐賀大学長、新里玲子全重協副会長、文化庁山下鑑査官、棕野日田市長、山口祥義佐賀県知事、松尾有田町長、十四代今泉今右衛門氏、今泉藤一郎有田町議会議長



大会開催挨拶をする松尾町長



視察研修の様子（今右衛門窯）

## ○佐賀・有田大会の概要

令和5年11月9日(木)、全重協佐賀・有田大会は、佐賀大学美術館（佐賀市）で開催した秀作展「日本の伝統美と技の世界」のオープニングセレモニーで開幕しました。この大会は、全国に16ある工芸技術分野の重要無形文化財保持団体と関連24市町村が連携して、技術の伝承と保存活用を行う取組みの一環として、毎年持ち回りで行われているものです。今大会は、初の記念大会ということもあり、日本全国から200名を超える歴代最大規模の参加者が集まりました。セレモニー終了後は、秀作展をじっくりご見学いただいたのち、大会会場である焔の博記念堂（有田町）へ移動しました。

記念堂にて昼食を兼ねた分野別交流会（「陶芸」「染織」「漆芸」「和紙」の4分野に分類）や、役員行政連絡会議を行い、文化財を取り巻く現状や今後の課題など、多岐にわたって議論を交わしました。

大会は全重協会長である棕野美智子日田市長、全重協佐賀・有田大会会長である松尾佳昭有田町長のあいさつに始まり、文化庁の山下信一郎文化財鑑査官や南里隆佐賀県副知事よりお言葉を頂戴しました。さらに長年の功績をたたえ、各保持団体から推薦された総勢15名の方を表彰しました。大会に続いて行われた総会では、令和4年度の事業・決算報告や令和5年の事業計画（案）、次回開催地（三重県鈴鹿市）などについて協議し、承認を得ることができました。

その後はいよいよ、佐賀大学芸術地域デザイン学部制作による記念大会特別映像が初披露され、それに関して大学生を交えたトークセッションも行われました。引き続き情報交換会の席上では、有田ならではの碗琴や磁器太鼓の演奏や、皿かぶり競争を体験していただきました。

翌10日は、有田町内視察研修ということで、有田焼の源流である泉山磁石場や、町内の2つの保持団体である柿右衛門製陶技術保存会（柿右衛門窯）、色鍋島今右衛門技術保存会（今右衛門窯）を見学し、有田町をまるごと堪能いただいたところで、無事終了しました。

## ○記念大会特別映像

今大会は「つなぐ」をテーマに、有田町と包括連携協定を結ぶ、国立大学法人佐賀大学の協力のもと開催されました。その最大の目玉が学生が制作した2本のドキュメンタリーです。柿右衛門製陶技術保存会を題材にした『想いをつなぐ～伝統の継承者たちと過ごした3日間』と、色鍋島今右衛門技術保存会を題材にした『静寂（しじま）の座～有田焼職人が見つめる世界を覗く～』。それぞれ40分程度の超大作ですが、伝統を受け継いできた職人の姿を、若い感性がどのように捉えたのかを紹介しています。初披露後、保持団体の方々からは「時間を忘れて見入った」、「とにかく、面白かった」、「同じ伝統工芸を支える



団体として、共感するところが多々あったし、若い人はこんな風に考えていたのかと参考になった」と非常に好印象でした。

これらの動画はYouTubeでも公開されています（チャンネル名：無形の文化と有田焼）。ぜひご覧ください。また、当館にて動画のDVDの貸出も行いますので、お気軽にお問い合わせください。

（電話：0955-43-2678 有田町歴史民俗資料館）

## ○秀作展「日本の伝統美と技の世界」

大会初日である令和5年11月9日(木)から26日(日)まで開催された秀作展は、会場である佐賀大学美術館（以下、佐大美）の来場者が2,000名を超え、大盛況のうちに終了しました。秀作展は、高度な工芸技術を駆使して作られた作品が一堂に介し、それぞれの団体が受け継いできた伝統文化を目の当たりにすることができる場です。特に今回は「体験コーナー」を充実させ、普段は決して触ることができない工芸品の数々を、直接触れることができるようにしました。

特に人気だったのが『書いてみよう』という手漉き和紙の書き比べコーナーと、『着てみよう』という着物の着用体験コーナーです。和紙の書き比べは、産地や漉き方によってこんなに違うのかと、皆さん驚いていたのが印象的でした。会場では前述の2本のドキュメンタリーも放映し、まさに「見て、聞いて、触って」楽しむことができる秀作展となりました。さらに、大学美術館での開催ということもあり、美術や書道を専攻する学生はもちろん、理工学部や校舎の離れる医学部の学生までたくさん来場され、若い方に日本が誇る本物の伝統技術を知ってほしいという私たちの願いが十分に叶うこととなりました。

## ○関連事業

### ●制作実演

11月11日(土)、佐大美にて柿右衛門製陶技術保存会の職人による上絵付け工程の実演と、色鍋島今右衛門技術保存会の職人による下絵付け工程の実演が披露されました。来場者の皆さんは、伝統の技を目の当たりにし、その動きに魅入っていました。

### ●体験しよう！重要無形文化財の世界（町内小学校出前講座）

11月14日(木)有田焼以外の重要無形文化財の世界を体感してもらおうと、有田町内の小学校への出前講座が行われました。大山小学校の5年生と、有田小学校の4・5年生が『伊勢型紙』を、有田小学校6年生が『久留米絁』を、実際に職人が来られて、子ども達に体験させていただきました。子ども達は、初めて見る染織の技術に驚きながらも熱心に活動していました。

### ●秀作展見学ツアー

11月17日(金)、有田町公民館主催の「ふるさと歴史学」講座の一環で、有田町民を佐大美まで送迎する秀作展見学バスツアーを実施しました。参加者は18名で、秀作展はもちろん、初めて佐大美に来館された方も多く、秀作展だけでなく常設展も楽しまれていました。

### ●伊勢型紙しおり制作ワークショップ

伊勢型紙のしおり制作ワークショップを下記のとおり実施しました。

- ・佐大美会場 11月18日(土) 参加者36人
- ・有田会場（生涯学習センター） 11月19日(日) 参加者35人

参加者の皆さんは職人の指導のもと、各自しおりを作成しましたが、中には職人の技をしっかりと見るため一日中会場にいる方も！実際に体験することで、職人の技術の高さをより実感できるものとなりました。



秀作展会場全景



『書いてみよう』コーナーの様子



上絵付け工程の実演の様子  
(柿右衛門製陶技術保存会)



重要無形文化財久留米絁技術保持者会山村省二会長に教わる有田小学校6年生



伊勢型紙技術保存会内田勲会長に教わる参加者たち（有田会場）



## 有田中学校2年生が職場体験にやってきました!

ここ数年、新型コロナウイルスの蔓延によって、中学生の職場体験も中止や縮小を余儀なくされて、当館にも、中学生が職場体験の代わりに、「博物館学芸員」の仕事について、対面や電話にてインタビューに来ていました。しかし令和5年度は、ようやく職場体験が復活したということで、9月6日(木)～7日(金)の2日間、歴史が好きで学芸員になりたいという夢を持つ有田中学校2年生1名を迎えることが出来ました。

初日は、館内及びバックヤードの説明と「博物館学芸員」になるためには、どういった資格が必要なのか、どのような進路があるのか、といった座学を中心に実施、2日目は、ちょうど有田町で発掘作業（小路庵の

発掘）を行っていたことから、発掘体験を中心に実施しました。ほかにも、陶片の水洗いや史跡探訪、そして拓本という、文化財を記録するために、石碑や土器などに刻まれた文様を、紙を押し当てて墨で写し取る作業も体験してもらいました。今回の生徒は歴史好きということもあり、どの作業も楽しんで取り組まれていました。思っていたより難しいことも多かったようですが、何度も練習をするうちに上達してきました。

今回の体験によって、将来の夢がより明確になり、なりたい自分の姿をより鮮明に思い描き、いつの日か、共に有田町の文化財を守る仲間として再会できることを願っています。



水洗い終了後、乾かすために陶片を並べている様子



## 小路庵窯跡調査レポート

有田内山伝統的建造物群保存地区内に、伝統的建造物に指定されている大正時代に建てられた小路庵があります。ここは公選制の初代有田町長で、東洋陶器(現TOTO)の5代目社長も務めた江副孫右衛門の旧家として知られ、現在は、年末年始を除いて一般公開されています。昨年度、この一般公開に先立ち、屋敷地内の日本庭園を整備すべく重機で掘削を行っていたところ、予期せず正体不明の遺跡らしきものが出てきたとの連絡が、町の担当課より入りました。さっそく現地を確認したところ、何と庭園内の築山は登り窯を埋め立てて築いていたことが判明したのです。そのため、急きょ庭園の整備を中止して、本年9月から10月の日程で発掘調査を実施することになりました。

発掘調査では、3つの焼成室を持つ登り窯が発見され、最下部の焚き口に当たる胴木間は、横方向に4つ並んで設けられていることが分かりました。また、3つ連なる焼成室の中でも、中央の2室目が最もよく残っており、室内の下部に燃料の薪を燃やすための火床、その奥側には製品を詰めるための砂床が整然と並んでおり、その間には火床と砂床を分離するため棒状



焼成室（砂床、火床境、火床）



胴木間

の粘土塊を敷き並べた、火床境が設けられていました。

窯構造や出土した製品・窯道具などから明治期の窯と推定され、まさに孫右衛門の祖父や父が窯元として利用し、孫右衛門が東京高等工業学校（現 東京工業大学）卒業後に継ぐ予定であったものの、稼業の破綻により断念した窯そのものであることが分かりました。文献上は、明治期になると登り窯は屋敷地内に築かれることもあったことは知られるものの現存するものは皆無で、遺構としての遺存状況も良好な上に、歴史的にも履歴が明確な貴重な例です。また、有田の観光スポットの一つとして窯の廃材を組み上げたトンバイ塀が知られますが、そのトンバイ（耐火レンガ）が実際に窯でどのように使用されていたのかを、町なかで気軽に見ることができる稀有な素材でもあります。

予想だにしない出来事で、庭園の整備計画はいったん白紙の状態ですが、現在窯は自由に見学できる状態になっています。一度訪れてみてはいかがでしょうか。



小路庵窯跡 全景

## 季刊『皿山』

通巻 140 号 (令和 6 年 1 月 1 日)  
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒 844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山一丁目 4-1  
☎ 0955-43-2678 FAX0955-43-4185  
URL : <http://www.town.arita.lg.jp/main/169.html>